

## 二〇二二年度入学式 学長式辞

新入生の皆さん、入学おめでとございます。また、今日まで、入学する皆さんの勉学と生活を支えてこられたご家族をはじめ関係者の方々のお慶びも、如何ばかりかと存じます。心よりお祝い申し上げます。

厳しい冬を乗り越え、春爛漫のこの季節に、皆さんは晴れがましく高揚感に満ちあふれた時をお迎えではないでしょうか。

本日、新入生として迎えましたのは、五つの学部ひとつの学群を合わせ学士課程に<sup>1,479</sup>名、三つの大学院研究科に193名、

I-Design コミュニティカレッジに44名、合わせて<sup>1,716</sup>名の皆さんです。

公立大学では大阪公立大学、東京都立大学に次ぎ、三番目の規模を誇る総合大学となっています。

皆さんがこれから学ぶ北九州市立大学は、一九四六年に、小倉外事専門学校として創立されました。歴史を刻む中で、北九州外国語大学、北九州大学、そして二〇〇一年に現在の名称、北九州市立大学となりました。創立以来七七年の歴史を持ち、現在では全国より学生が集う、伝統ある総合大学となっています。

さて、皆さんが入学された総合大学、つまりユニバーシティとは一体何でしょうか。それは就職にいたる単なる通過点なのでしょうか。または受験勉強の疲れを癒し、働く前に一休みする場所なのでしょうか。そもそも大学での4年間は何のためにあるのでしょうか。

社会学者の吉見俊哉氏によれば、大学は3つの起源から生

まれています。まず第1に「教師と学生の協同組合」を起源とする「カレッジ」です。そこでは単なる専門知識を教えるだけの機関ではなく、知的生活が共同で営まれ、対面教育に基づくコミュニティとしての性格を有しています。第2に「研究と教育の一致」をめざした「ファカルティ」で、専門領域の研究者たちから構成される学部や学科の連合体です。そして第3に様々な知的専門職の分業に基づき、ネットワーク化された「ユニバーシティ」で、近代以降はここに官僚養成の使命が上乘せされました。現在の大学はこの3つの要素が複合したものとして成り立っています。このうち、コロナ禍のもとで最も危機的な状況にさらされたのが「カレッジ」としての大学です。

18世紀に活躍したドイツの哲学者イマヌエル・カントは、人間の認識能力の限界や道徳の本性、恒久的な平和について考察した人です。その著作『永遠平和のために』は古典でありながら、国際連盟や国際連合の設立に思想的に影響を与え、平和が脅かされ、人々が分断されている今日においても、繰り返し読まれています。普段の彼は規則正しい生活をしながら数々の哲学書を書きました。朝7時から10時まで、自宅1階で少人数の講義を対面で行い、ヨーロッパ各地から学生が訪れた人気のある教授でした。評判の高い教授や大学は広く学生を集めカレッジの基盤となり、それが都市を形成する一つの力ともなりました。その場では教授と学生の両者で対面に基づいた「知的創造」の営みが交わされたことでしょう。

昨今のコロナ禍や戦争は、人々のコミュニケーションを断し、この知的創造性に打撃を与え、本来、都市に活力を与える人の移動にも制限を加えました。大学においては留学や様々なフィールド活動などが自粛に追い込まれました。ここ

3年のコロナ禍の時期に大学が取り組んだことは、「ICT」技術を駆使してコミュニケーションや移動を補って、「カレッジ」を復権することでした。今後さらに制限が緩和されれば、グローバルな移動性を日常化しながら、対面とICT技術を融合したより高度な教育が期待されることでしょう。

「知的創造性」は大学にとって最も重要な機能ですが、この知的創造性の源は「自由な時間」と「自由な移動」です。しかし時間は有限で希少な資源です。何にどう使うかにより大学修了後の皆さんの姿は違ったものになるでしょう。例えば300ページの文庫本を1日2時間、毎ページ3分の速さで読むと4年間でほぼ200冊が限界となります。その200冊を系統立て読むのか、濫読するのか、冊数を減らして精読するのか、限られた冊数の中で読み方は無数にあります。自分の成長のために、どこからどう効果的に読むのか、それは皆さんに委ねられていくこととなります。

吉見氏にならない、限られた時間の使い方を、「時間予算」と呼べば、その予算配分はどのようになるのか、何にどれだけ使うのかを考える必要があります。明確な目標がある人は将来像を考えながら逆算してこの4年間でどうするか、この1年をどうするか、この1月をどうするか、そして今日1日をどうするかを考えるかもしれません。また、目標はおぼろげですが、その目標にピントを合わせた人は、自由な時間を使って、焦点を合わせていく必要があります。こうした長期的なビジョンを考える場として大学はあります。

カントは問います。「わたしは何を知ることができるか」、「わたしは何をなすべきか」、「わたしは何を望むことが許されるか」、そして「人間とは何か」と。これらを大学生活に置き換えた時、限られた学生時代という時間の中で、何を学び、

何を実践し、満足する学生生活で何を得るのか、そして自分とはどのような人間なのかをじっくり考える時期ということになります。方向性を見失いそうになった時は、是非基本に立ち返り、本学の3つのビジョンである「地域と歩む」、「環境を育む」、「世界（地球）とつながる」や、各学部・学群・研究科の掲げる理念・目的を思い出し、それを指針として各自、有意義な学生生活を送っていただければと思います。

こうした自ら考える人を手助けしてくれるのが教員であり、職員であり、学友をも含めた大学そのものなのです。本学は優秀な教授陣、職員、学生が国内外から集っております。是非身近なところから話しかけ、カレッジとしての大学のだいたいを満喫していただければと思います。数年後の卒業式においては、たくましく成長した姿に圧倒されることを期待します。まして、私の式辞といたします。

令和五年四月五日

北九州市立大学 学長 柳井雅人

#### 参考文献

2021年 吉見俊哉『大学は何処へ——未来への設計——』岩波新書、

2021年 萱野稔人『カント 永遠平和のために——悪を克服する哲学』NHK出版、2020年